



HACK

||

追跡

KAI SHIGIHARA



11 追跡

ジュリアスの意識が浮上したのは、兄のドミニクに肩をゆさゆさと揺さぶられたからだった。

「……ドニ？」

「そろそろ起きろ。色々わかってきたから」

「！」

のんきに眠っている場合ではない。ジュリアスは飛び起きた。するとそこは、自宅の地下室だった。

地下室といっても、薄暗い穴倉ではない。天井の一部は強化ガラスになっていて、地上からの光が室内に入ってきているし、換気システムも完璧だ。明るく広い地下室には、巨大なコンピューターが鎮座している。勿論、ジュリアスのお手製で、ジュリアス専用のものだ。

ジュリアスはその地下室にある長椅子に横になっていた。ドミニクが運んでくれたのだろう。地下室には他に、ドミニクの部下と思われる軍人たちが、持ち込んだパソコンを広げて作業をしている。目の前に巨大コンピューターがあるのにおかしな光景だが、ここのコンピューターはジュリアスの言うことしか聞かないから仕方がない。

「レスリーがさらわれた。自宅のマンションを出て、地下鉄の駅に向かっているところで、ワゴン車から降りてきた男に薬をかがされている。目撃者はいなかったが、マンションのセキュリティカメラに写っていた」

「見せて」

ドミニクが振り返って部下の一人に頷いて見せると、彼は持ち込んでいるパソコンの画面にその映像を出してくれた。

「それから、お前を狙撃した犯人のDNA検査結果が出た。ラッキーなことに、登録済みな奴だったぞ。出してくれ」

カメラ画像から切り替わって、個人データが表示される。

「ケビン・ロイド、二十八歳。科学者。二年前、ストーカー行為のために裁判にかけられて、接近禁止令を受けている。相手の女性のデータは出てこない」

「こいつだ」

「ビンゴ。さっき、母上に確認した。さすがにストーカーの名前までは知らなかったが、科学者だったと言っていた。今、レスリーのご両親と連絡をとろうとしているんだが、海外らしくて、まだうまくいっていない」

「それで、レスリーは？ 今どこに？」

「多分、レイノックス」

「レイノックス？」

渋い顔でドミニクは頷く。

「レスリーを乗せた車は、一直線に飛行場へ向い、そこから小型機が離陸している。フライト・プランによれば、行く先はレイノックス。だが、その空港から更に島に移動していると思われる」

出国しようとするれば、フライト・プランの提出とパスポートチェックは必須だが、レイノックス国内を移動するならば、繁雑な手続きは不要になる。どこが最終目的地かは、明確にわからない。

「理由は？」

「ケビン・ロイドはレイノックスの企業で働いている。この男、物凄く頭がいいぞ。天才だって評判だ。人工知能なんかの研究をしていて、その道の第一人者。会社はこいつのために大きな研究所を作って、好きに研究をさせているらしい。その研究所があるのが、レイノックスにある小さな島。島ごと、その企業の持ち物で、研究所関連の建築物しかない。船着き場もあるし、飛行場もある」

外国であり、尚且つ民間企業の所有物。軍がそう簡単には手出し出来ない場所だ。

しかも、ケビンが所長なら、研究所は彼の作ったシステムで堅く守られているに違いない。潜伏先として最適な場所だろう。

「今、諸々の証拠を揃えてレイノックス警察に話しをしているところだ。とりあえず、お前の狙撃犯はケビン・ロイドで決定的なわけだから、身柄引き渡しを要求している」

「ケビン・ロイドがその研究所にいるかどうかは、わかっていない？」

「今、レイノックス警察が確認してくれている」

と、ドミニクはため息をついた。

隊長のくせに、常に先頭切って走り出していくドミニクにとって、人任せで待つというのは苦痛なのだろう。

「隊長、飛行場のベンから連絡です」

「よし、スピーカーでだせ」

「隊長！ ベンです！」

風が強いのか、がばがばいう音に負けじと、太い男の大きな声が聞こえてきた。

「整備士に確認とれました。荷物の中に、大きなコンテナがあったそうです。人間を一人、拘束して隠しておくのに十分な大きさだったそうです。それから、乗客の中に車椅子の男がいました。写真で確認したところ、ケビン・ロイドに間違いようです」

「でかした、ベン！」

「ありがとうございます！」

「飛行場に医務室みたいな設備はあるか？ ケビン・ロイドが治療を受けていないか、確認してくれ。どの程度の傷なのかもな」

「了解しました！ また連絡します！」

これで、レスリーがケビン・ロイドと一緒にレイノックスへ向かったのは、ほぼ確実だろう。それだけ距離があいてしまえば、もうジュリアスにレスリーの気配を見つけることは出来ない。中途半端な自分の力が、本当に嫌になる。

だが、ここからなら、コンピューターを自在に使って、ケビン・ロイドの情報をいくらでも集めることが出来る。レスリーの方から二年前の事件データをさぐることは出来なかったが、ケビンのほうから攻めていけば、何か拾えることもあるだろう。

「やめとけ」

長椅子から立ち上がろうとしたジュリアスの肩を、ドミニクはぐいと押した。強引にまた長椅子に腰をおろされる。

「ドニ」

「いいから。力、温存しとけ」

「隊長、司令官からメールです」

二人とも、ぎょっとして振り返る。司令官とは、二人の父親である。

「レスリーの両親と連絡がとれたそうです。事情を知っている弁護士が、今、ここに向かっているの、話を聞くようにと」

「了解しましたと、返信しておいてくれ」

「了解です」

時計を見ると、まだ九時前だった。今朝の司令官の出勤予定は、午後からだったはず。

「息子が狙撃されて、事務官が拉致されたんだぞ。家にいるわけないだろ」

「そうか……そうだよな」

「レイノックスに逃げ込まれた時点で、これは俺達だけで片づけられる問題じゃなくなったしな。しかも、相手が雑魚ならともかく、有名な天才科学者となれば、おいそれとは手出し出来ないかも」

「除隊しといてよかった」

ドミニクが軍を率いて、レイノックスにいるケビン・ロイドを逮捕することは出来ない。それはレイノックスの主権侵害になる。国内ならば、狙撃されたジュリアスも拉致されたレスリーも貴族なので、少々の無茶も問題にならないが、レイノックスとなれば話は別。きちんと法にのっとって、正当な捜査がされ、逮捕となるだろう。

今回、ジュリアスを狙撃したのはケビン・ロイドだとする決定的な証拠があるので、レイノックスの司法当局へケビン・ロイドの逮捕要請がされ、レイノックス側も了承するだろう。そして、レイノックスの警察がケビン・ロイドを逮捕して、引き渡しということになる。時間がかかる。しかも、レスリーの拉致に関しては、ケビン・ロイドが関わったという証拠が今のところない。状況証拠ばかりで、逮捕が要請できるのか微妙なところだ。どちらにしても、レスリーのために警察が動けるのには、もっと時間がかかるだろう。

だが、ジュリアスは一般人だ。一般人がケビン・ロイドの研究所に侵入しても、国際問題にはならない。ジュリアスは不法侵入の罪に問われるだろうが、それだけだ。それでレスリーを救いだせるのなら、なんということはない。

「お前！ 一人で行こうとか、馬鹿なこと考えるなよ」

「ドニは行けないよ。そんなことしたら、親父の首が飛ぶだろ」

「お前が行ったって、親父の首は飛ぶ」

「全く迷惑かけないってわけにはいかないだろうけど、首はない。謹慎ぐらいだよ」

「これだから三男坊は！ ちょっと待って。今、俺が行けるようになんとかしようとしてるんだろ」

「時間ないから」

「一人で行ってどうする！ それに、時間ならあるさ。ケビン・ロイドは、レスリーを愛しすぎてるわけだろ？ 彼女を大切にしても、危害は加えないさ」

「甘いわよ、坊や」

突然割り込んできた声に、二人は驚いて顔を上げる。地下室におりてくる階段の上、体格のいい女性が仁王立ちになって、二人を睨んでいた。

「す、すみません、あの、取り次ぐと言ったんですけど」

その女性の後ろから、玄関で警護をしていた若い軍人が青い顔をのぞかせた。

「私は急いでるの！ レスリーの弁護士、カミラよ。事情はご両親から聞いたわ」

ドミニクは、後ろの軍人に頷いて見せる。若い男は、ほっとした表情を隠さず、そそくさと持ち場へ戻っていった。

「あなたが、ジュリアスね」

と、自己紹介もなしで、カミラはまっすぐにジュリアスの顔を見てそう言った。

「……レスリーが？」

「ええ、そう。昨日、写真を見せてもらったばかりなの」

これよと、カミラはテーブルの上に、昨日預かった盗撮写真を広げた。

「一昨日、こっちの写真が。昨日、こっちの写真が届いたそうなの」

「ケビンからですか？」

「差出人不明だけど、間違いないわね。二年前も同じことをしたことがあるから」

切り裂かれたキスの写真を手に取り、ジュリアスは険しい顔をする。ドミニクはレイノックスでの写真を広げている。

「盗撮に気付かなかったのか？」

任務中なので、気を張って周囲に気をつけていたはずだと、ドミニクは言いたいのだろう。

「オンラインにならない電子機器は守備範囲外だ」

「結構、気付いているわよ」

と、カミラはカメラ目線のジュリアスの写真を示してくれた。

レイノックスで、レスリーは周囲の視線を常に集めていた。言うまでもなく、男性の視線が圧倒的に多かったし、中には下心丸出しの不快な視線もあった。そういった視線に対し、ジュリアスは撃退目的で睨みをきかせていた。このカメラの視線にも、睨んでいたのだろう。盗撮に気付いているわけではない。

「レスリーの個人的な話をしたいの。部外者には席を外してもらってもいいかしら」

ドミニクは頷いて、部下たちに席を外させる。

「私はジュリアスの兄で、レスリーの職場の上司、ドミニク・マナーズです。今、私を中心にレスリーの救出作戦をたてています」

と、ドミニクは部外者ではないアピールをして、カミラと握手。ここらへん、ドミニクはそつがないのだ。そして、カミラの視線を受けて、ジュリアスは握手の手を差し出す。

「ジュリアス・マナーズです。レスリーの……、恋人、と思います」

「まだお付き合い始めたばかりなんでしょう？ レスリーが言っていたわ」

「はい」

始めたばかりどころか、二日前に始まったばかりだ。

しかも、ジュリアスは愛していると告げたが、レスリーからは同じ言葉を返してもらえなかった。だが、レスリーも付き合い始めたと認識してくれていたのは嬉しかった。

「もっと自信を持っていいと思うわ。あのレスリーがお付き合いを始めようと思えただけでも、凄いことだもの。レスリーはケビンと別れた後、誰ともお付き合いをしたことがないし、それも仕方がないと思うぐらいケビンとは色々あったのよ」

「ストーカー行為だけではなかったということですか？」

冷静なドミニクが適格に話をすすめてくれる。

「ええ、レスリーが結婚しようとしてからはね」

「結婚」

啞然とつぶやいたジュリアスに、カミラは小さく頷く。

「別れたいレスリーにケビンがずっと付きまとっていたから、お父上の伯爵が、結婚話をまとめたの。そうすれば、ケビンも諦めるだろうと思ってね。でも、逆効果だったのよ。ケビンのストーカー行為はエスカレートして、結婚相手には嫌がらせをするし、レスリーには暴行をはたらいたの。レスリーが、ケビン以外の人とは結婚しないと言うまで、何度もね」

声もない男たちを見、カミラは小さく首を横に振る。

「あの男の頭の中では、今もレスリーは自分の恋人なのよ。だから、レスリーがジュリアスとお付き合いを始めると、こうして警告してきた」

と、レイノックスでの写真を指し示す。

「そして、これを目撃して、ブチぎれたような気がする」

切り裂かれたキスの写真を示す。

「二年前の結婚相手は、父上が決めた人で、婚約者といっても名ばかりの人だった。それでも、結婚をやめたいと思えるぐらいの嫌がらせをうけたの。あなたは、狙撃されたって聞いたわ。レスリーが心配なの」

ドミニクとジュリアスは顔を見合わせる。

どうやら、ジュリアスが思っている以上に、時間はないようだった。

カミラが帰ると、ジュリアスは即座にコンピューターにアクセスした。中央の肘掛椅子に座り、ジュリアスの力を伝えやすくするヘッドギアを装着すると、ケビン・ロイドと彼の研究所に関

する情報を集め始める。彼は有名人のようで、すぐに膨大なデータが集まり始めた。

「ジュリ、島周辺の地図だして」

ドミニクのお願いに、三つある巨大モニターの一つに、研究所のある島とその周辺の地図を表示させる。

このコンピューターはジュリアスが自分のためだけに設計したもので、意識を保ったままでもこれぐらいの操作はなんということはない。

「近くに拠点にできそうな場所がないな。空母から飛んで降下するか。動かせるのあったかな」

ドミニクはどこまでも行動派だ。

「派手すぎる」

「だが、最速だ。ちょっと軍のシステムのぞいて、近くにいる空母を探してくれ」

「……ない」

「それなら、地上から行くしかないか。研究所のセキュリティーはどうなってる？ まさか武装してないよな？」

兄の過激な思考に、ジュリアスは逆に冷静になるようだった。

「研究所のセキュリティーは、最新でかなり強固らしい。設計は、ケビン・ロイド自身。彼のオリジナルだ。武装はしていないが、こちらの武器が通用しない可能性が高い」

ジュリアスは、なんとか入手できた研究所のデータを、モニターに表示させる。

わかったのは、外観の航空写真、完成時に公開された研究所のデータと、噂話の類。

「研究内容からして、テロリストに襲撃されることを想定しての設計になっている。攻撃能力はなさそうだが、セキュリティーはソフトもハードも完璧だ。外部からの侵入を許さないようになっている。核兵器での攻撃にも耐えうる構造だそうだ」

「マジか」

「研究所内部には、一年ぐらい外部と接触がなくても問題ないような備蓄がある。立てこもられたら、手も足もだせなくなるということだ」

正面から攻めるのは、得策ではない。中から扉をがんと閉められて、レイノックス軍に助けなど求められてしまえば、こちらが逮捕されることになる。レスリーは救えない。

「……ジュリが、システムを乗っ取ればいい話だよな」

「天才が作ったシステムだ。相手に気付かれずに、こっそり入りこんで乗っ取るのは、かなり難易度が高い」

離れていては不可能だ。メインコンピューターに直接アクセスできるラインが、最低限ほしい

。だが、まずこの研究所内部に侵入することが、難しい。侵入できても、攻略するのに時間はかかるだろうし、ジュリアスはその間、意識を失って動けなくなる。攻略出来たとしても、その後も意識不明だ。レスリーを救うためなら、自分がどうなっても構わないが、ドミニクは絶対に反対して協力してくれないだろう。ドミニクが協力してくれなければ、システムを乗っ取っても、レスリーを助けに行ってくれる人がいない。

(半端者め。うんざりだ)

駄目目で、ここから研究所にアクセスしてみるか。こんなに距離がある場所を攻略するのは初めてだが、何事にも初めてはある。

(危険すぎる賭けだ。もし、ケビンに気付かれたら。警戒されて研究所を閉ざされたら。違う場所に移動されたら)

怯えていたレスリーが思い出される。気丈でいつも冷静で頭のいいレスリーが、小さな子供のように怯えて身をすくませていた。

盗撮写真が届いた時、ケビンに拉致された時、レスリーがどれほどの恐怖を感じたか。あれほどの恐怖を押し込めて、平静を保とうと努力していたか。ジュリアスは誰より知っている。

これ以上、レスリーに怖い思いはさせたくない。そのためにも、ケビンには何事も彼の思い通りに進んでいると思わせるのが重要だ。

(無謀なことは出来ない。成功の可能性が高いやり方をしなければ)

どうすればいいのか、ジュリアスにはわかっていた。

ケビンの研究所の仕様を見た時から、こうするしか攻略する方法はないと、わかっていた。

(.....迷っている場合か？ 怖がっている場合か?)

レスリーは必死に過去を乗り越えようとしていた。怖いと訴えつつ、ジュリアスの気持ちを受け入れようとしてくれていた。信じようとしてくれていた。

今だってきっと、ジュリアスが助けに来ると信じてくれている。

その信頼に答えないのか。答えられないのか。それでいいのか？

(俺が、レスリーを助け出す。必ず、俺が)

どんなことをしても。何をしても。

(やりとげてみせる)

真っ暗だった中央の巨大モニターに、不意に光がともった。半ば強引に設置させられた、ホットラインだ。

「ジュリアス？ いるね？」

モニターに映ったのは、現在のジュリアスの上司、レイ。そして彼の背後には、父である軍司令官の姿も見えた。場所は、父のオフィス。

「ドミニクもいる？」

「います。よかった。話があるんです」

ドミニクはモニターへと向き直る。

「どうやら時間がないようです」

と、レスリーの弁護士から聞いた話を報告し、送りつけられた盗撮写真もしめした。

「俺が考えるに、そもそもレスリーがまた目を付けられたのは、レイノックスでジュリアスと恋人のふりをするという任務のせいだと思います。あのリゾートは、ケビンの島から遠くない。休暇で滞在していたとしても、不思議はありません。そうなると、彼女をこんな目にあわせた責任の一端は、軍にあるのではないのでしょうか」

「そうだね。彼女をジュリアスのパートナーに推薦した僕も責任を感じるよ。だから、彼女の救出には、僕も協力する」

と、レイは振り返って、背後にいる司令官にむけて言った。

ジュリアスとドミニクの父、近衛軍総司令官のダン・マナーズは、通信の最初から渋い表情で口を閉ざしたままだった。

ダンは五十代後半になっていたが、見た目には四十代に見られる若さを保っていた。黒髪には少し白いものが混じってきていたが、青い目には今も若々しい輝きがあり、スレンダーで筋肉質の体格も変わらない。司令官となり、落ち着きと貫禄を増し、若い時よりも彼のファンは増えているぐらいだ。

「ジュリアス、どうしたい」

声をかけられ、ジュリアスは背筋がぴんと伸びるような気分になる。兄弟で、父を尊敬していない者はいない。

「レスリーを助けます」

「それは勿論だ。どうやって助けたいのかと聞いている」

「……近くまでいければ、彼女の気配を読めます。船か飛行機で近づける距離でも、彼女ならわかるから」

「それで？」

「彼女とコンタクトがとれたら、……内からシステムを乗っ取ります」

「出来るな？」

「やります」

モニターの向こうで、ダンは頷いて見せた。口元に魅力的な微笑を浮かべる。そして、ごくごく当たり前という口調で言う。

「お前なら出来るさ、ジュリアス」

レイも嬉しそうな顔で、ダンの言葉に何度も大きく頷いている。

尊敬する二人に、こうして太鼓判を押してもらえるのは心強かった。

これで行動方針は決まったという感じに、ダンは矢継ぎ早に指示を始める。

「レイ、船を出してもらえますか。あなたの会社の大型船、あの辺りに停泊してますよね」

「はいはい、してますよ。喜んで出しますよ」

「ドミニク、同行しろ。一中隊連れてな」

「ありがとうございます！」

喜色満面でドミニクはモニターに敬礼するが、ダンは釘をさすのを忘れなかった。

「島はレイノックスの領土だ。忘れるなよ。レイノックス警察に連絡して、あの島にケビンがいること、レスリーが監禁されていることが証明されたら突入を要請する。その補佐だからな」

「了解しました！」

「ジュリアス、証拠を早めにあげろよ」

「了解です。ありがとう、父さん」

多くを語らなくてもわかってくれる、信じてくれる父の存在にいつも助けられる。

「無事で帰れ」

そう言って通信を切った父に、ジュリアスは感謝の気持ちをこめて、小さく敬礼を送った。

